JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	クラスター推進組織と「間」のマネジメント(地域クラスター，第20回年次学術大会講演要旨集II)
Author(s)	宋，海剛；近藤，修司
Citation	年次学術大会講演要旨集，20：932-935
Issue Date	2005-10-22
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/6187
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

2E16　クラスター推進組織と「間」のマネジメント

○宋　海剛，近藤修司（北陸先端科学技術大学院大）

はじめに　報告の目的

本報告の目的は、これまでのクラスターに関する理論グループの整理・検討を踏まえた上で、知識マネジメントの視点から、クラスターを推進するための新しいマネジメントコンセプト― 「間」のマネジメントを提示することである。

1、クラスターに関する理論グループの整理と検討

まず最初に、これまでのイノベーションがなぜある特定の地域に集中するかを直接的か間接的に解説しようとする主な四つの理論グループを整理・検討する。

1、伝統的産業集積論（マーシャル、ウェーバー、シュンペーター、Hoover、Peroux、Scitovsky,Vernon）

2、ネットワーク型生産システム論（Becattini,GREMI,Scott and Storper, Annalee Saxenian）

3、競争と貿易論（Vernon,Utterback,Porter,Krugman）

4、知識経済論（GREMI,リチャード・フロリダ、Morgan、Cooke）

次に整理と検討の結果として先行理論の三つの問題点を指摘する。

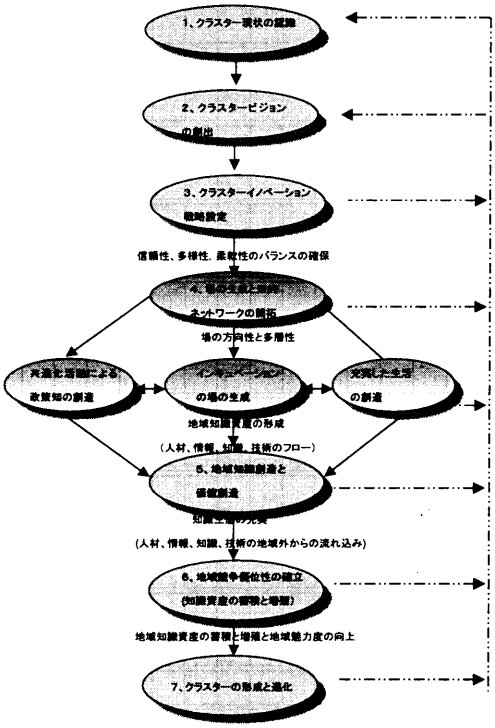
①各理論はそれぞれのコンセプトや概念を生み出し、「共通語」がないこと。②セミマクロかミクロかどちらかの一つのアプローチを取っている。どちらかの一つのアプローチではクラスターの全貌を把握しにくい。特に③従来のモデルでは知的転換に対応できないこと。制度手段主義と経済中心主義の限界がきている今日、経済よりも社会、口先だけの人間中心から真の人間中心へのパラダイムチェンジが求められている。また、これまでの研究は、クラスターとは何かとか、なぜクラスターなのかとか、クラスターそのもののダイナミクスとはなにかなどに関する議論が多い一方、クラスター推進組織のマネジメントについての研究はまだまだ少ないのが現状である。また、今までのクラスター推進組織に関する研究においても、知識統合や知識活用という『知識管理』のレベルに留まっているケースが多い。その上、従来の知識マネジメントも人間の論理的知と洞察的知を重視したが、人間の感情的知は十分考慮されていなかった。

2、知識の視点から見るクラスター推進活動のフレームワーク

上述した従来の理論の問題点を克服するために、知識の視点からクラスター推進組織におけるマネジメントのフレームワークを提示する。このフレームワークの特徴としては社会的イノベーション（知識創造と人間主義の追求）、経済のダイナミクス（価値創造）そしてローカルガバナンス（クラスター推進活動）といった三つの認識的視点から構成され、クラスター現状の認識（現状の姿）、クラスタービジ

ョンの創出（ありたい姿）、クラスターイノベーション戦略の設定（なりたい姿）、場の生成と知的ネットワークの開拓、地域知識創造と価値創造、地域競争優位の確立、クラスターの形成と進化といった七つのファクターに構成されることである。

図1　クラスター推進活動のフレームワーク



3、クラスター推進組織と「間」のマネジメント

上述したクラスター推進活動のフレームワークを実現するために、クラスター推進組織の「間」のマネジメントのファクターモデルを提示する（図2）。

「間」とはダイナミック的なインターコンテクストと定義し、主に空間的次元（構造的穴、空間の間隔）、時間的次元（時間の間隔）と人間的次元（心理的、関係的、認識的ギャップ）という三つの次元がある。「ダイナミック的」というのは、「間」のマネジメントは常に動的プロセスであることを意味するほか、「タイミングよく」、「リズムよく」「間」を埋めたり、「間」を置いたりすることによって、クラスター推進活動の流れを創っていくことも意味する。姿とは自我が物事、環境そして自分自身に対する構え、理解、認識などのコンテクストされたイメージの集合体と定義する。場とは共有されたコンテクストと定義されている（野中 2000）。

クラスターの推進活動を議論する際に、従来の「組織的知識創造理論」は大変有意だが、そのまま適用することはできない。なぜならば、クラスター推進組織は従来の組織とは異なる資質を持っているからである。クラスター推進組織のメンバーは、産学官民から来る、それぞれ異なる価値観、知識体系、専門用語、行動志向、立場、モチベーションを持っているので、従来の組織より、共通のビジョン、目標、価値観を共有す

ることが遥かに難しい。また、クラスター推進組織への参加も個人の意識に委ねられ、強制や従来の指揮命令系統は効かない。そのため、クラスター推進組織において、クラスタービジョンの創出（ありたい姿）、戦略の設定（なりたい姿）、現状の認識（現状の姿）、更にこれら「姿」の浸透と共有が大きな課題となる。これらの姿を明確にし、姿の「間」を認識できなければ、実践に移る行動のパワーも出ないし、各メンバーのベクトルをあわせることもできない。その上、環境が激変する中で、絶えず現状の姿、なりたい姿、ありたい姿を再定義することが重要である。その上、姿の創出プロセスを繰り返しながら、姿の実現プロセスを構築する必要がある。姿の創出による政策知の創造は姿の実現プロセスによる価値創造（事業創造と生活創造）に繋がって初めて、政策知の創造が意味を持つようになる。

これら姿の「間」のマネジメントを行うコンテクストは「場」と言える。最近、場の概念を用いて地域内の相互作用を分析する動きが少ないながらも出てきた。これらの研究は地域内の多様な相互作用、学習、そして事業コンセプト創造を促進し、知識創造を促進する場の概念の有効性、また、場の形成条件とプロセスに研究の重点を置いた。これらの研究は殆どある一つの場、或いはローカル的いくつかの場に限定して、議論するケースが多い。確かに、クラスター計画を推進するためには、従来の組織の壁を打ち破り、地域での場の生成と活性化が必須となる。しかし、皮肉なことに、こられの活動は結局また新しい壁を作ってしまうことが多い。環境が激変する中、また、知識社会における多様性と創造性の重要性を考えれば、クラスター推進活動が一つの場に固執せずに、必要に応じて、場の作り変えや多数の場を同時にマネジメントしなければならない。ただ、場と場に「間」があるため、それを埋めるか、渡り橋を掛ける作業が必要である。即ち、場の「間」のマネジメントである。また、地域は場の集合体であるならば、これらの重層的場は物理的地域の境界を超越し、グローバル的性質を持つものも少なくない。これは、地域にとって、場の「間」のマネジメントの複雑さを更に増していることを意味するとともに、地域知識資産を活用しながら、グローバル知を獲得するチャンスになることも意味する。これら場の「間」のマネジメントをしながら、地域の現状の姿、なりたい姿、ありたい姿を描き、実現しなければならない。何故ならば、知識社会においては、グローバル的視点がなければ、地域の「姿」はもはや描けないし、実現できないからである。その一方で、姿の「間」のマネジメントはまた場の「間」のマネジメントの規模、目標、方向性を決めることになる(図２、３)。

図２　「間」のマネジメントのファクターモデル

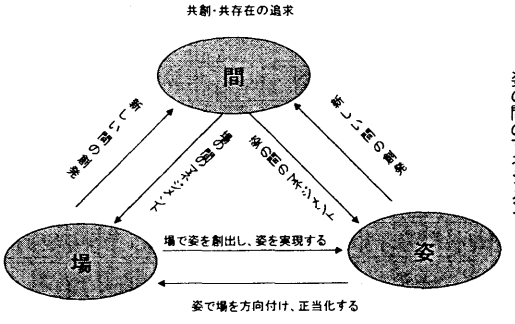
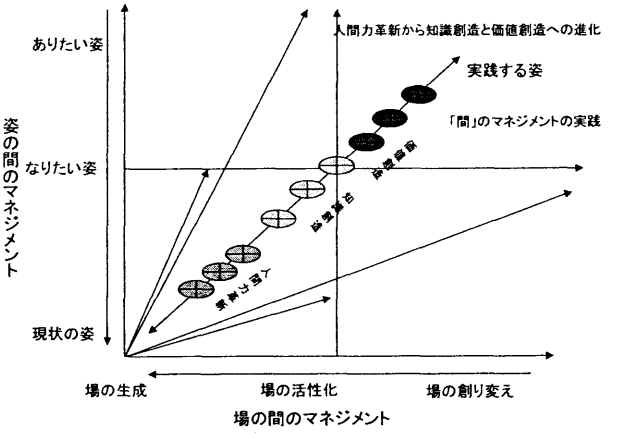


図３　「間」のマネジメントのイメージ図



「間」のマネジメントの出発点も目的も人間力革新である。徹底した人間主義の追求と経済合理主義が共存・共生するマネジメントを通じ、人間力革新を限りなく求めることで、地域知識創造、事業創造と生活創造への進化を遂げることができる。

今後の課題

本報告はクラスター推進組織における「間」のマネジメントという新しいコンセプトを提示した。また「間」のマネジメントのファクターモデルの構築を試みた。しかし、本研究には以下のような多くの研究課題が残されている。

①、「間」のマネジメントのプロセスモデルの提示

②、「間」のマネジメントのツールモデルの構築

③、実証研究

主要な参考文献

Capello, Raberta and Alessandra Faggian (2002), "*Knowledge, innovation and collective learning: theory and evidence from three different productive areas in Italy,*" ERSA Conference papers, European Regional Science Association.

Cooke, Philip(2001), "*From Technopoles to Regional Innovation Systems: The Evolution of Localised Technology Development Policy,*" Canadian Journal of Regional Science, XXIV:1, pp.21-40.

伊丹敬之, 西口敏広, 野中郁次郎編(2000)『場のダイナミズムと企業』東洋経済新報社

Florida, Richard(1995), "*Toward the learning region,*" Futures, Vol.27.5, pp .527-536

Maskell, Peter and Anders Malmberg (1999), "*Localised Learning and Industrial Competitiveness,*" Cambridge Journal of Economics, Vol.23, pp.167-185.

Morgan, Kevin (1997), "*The Learning region: Institutions, Innovation and Regional Renewal,*" Regional Studies, Vol31.5, pp.491-503

Moulaert, Frank and Rarid Sekia (2003), "*Territorial Innovation Models: A Critical Survey,*" Regional studies, Vol. 37.3, pp. 289-302.

野中郁次郎, 竹内弘高著 (1996) 『知識創造企業』梅本勝博訳　東洋経済新報社

野中郁次郎, P.ラインメラ, 柴田友厚(1998), 「知識と地域」『オフィス・オートメーション』第19巻第1号

Nonaka, I., R.Toyama and N.Konno(2000), "*SECI, Ba and Leadership: a Unitfied Model of Dynamic Knowledge Creation,*" Long Range Planning, Vol.33, pp.5-34

Scharmer, C.O.(2000), "*Presencing: Learning From the Future As it Emerges,*" Presented at the Conference On Knowledge and Innovation, Finnland